

読谷村座喜味の婦人会と地域子育て運動
—元婦人会長・松田敬子の Life History Study—

嘉納英明

Women's Association and Child-Rearing Movement in the Yomitan Village
—A life history study of Keiko Matsuda—

Hideaki Kano

要 旨

本研究は、読谷村の婦人会で活躍した松田敬子の Life History Study を通して、地域の復興と子育て運動に関わる中で、松田の子育て観がどのように形成されたのかを明らかにするものである。松田は生活改善のため、冠婚葬祭の改善、生活環境や衛生の整備等を手がけ、また地域復興のために婦人会エイサーを立ち上げる等の村の復興に貢献した。一方、子どもの遊び場の設置や子どもの健康・体力づくりのために十羽養鶏運動を起こしたり、共通語励行と学力向上のためにも教育隣組を組織化したりする等、松田を中心とする座喜味婦人会は、地域興しや教育復興におけるキーパーソンの役割を果たし、地域の子育て運動に大きく介在した。

キーワード：婦人会，子育て，地域の復興

Abstract

This research clarifies, through a life history study of Keiko Matsuda who was active in the Yomitan Village Women's Association especially as her life history relates to the campaign for child-rearing and regional revival, how Mrs. Matsuda's views on child-rearing were formed. In order to improve the quality of people's lives, she got involved in maintaining hygiene and the environment, had to do with the improvement of ceremonial occasions, and made contributions to reviving the village by starting up a women's association eisa group. In addition, she started the "raising 10 chickens" activity as a means to promote children's health and set up playgrounds for children; she organized an educational neighborhood association for the betterment of academic skills and the strict enforcement of the common dialect; and under the leadership of Mrs. Matsuda, the Zakimi Women's Association, fulfilling a key role in the area of education revival and regional prosperity, intervened extensively in regional activities relating to child-rearing.

Key words: women's association, child-rearing, regional revival

1. 研究の目的

(1) 沖縄の婦人会

沖縄で婦人会が発足したのは、明治後期から大正にかけての時期である。金武村（現在の「金武町」）の婦人

会の前身「母子会」、宜野座村の惣慶の「処女会」はこの頃に結成され、読谷村では、大正前期において各字（集落）の区長の世話により部落婦人会が発足している。読谷村の婦人会の行事・活動は、清掃検査、講演会、総会、字ユエ活動、因習の打破、経費の節約運動、養蚕業

の奨励、生活改善、子弟の教育等であった⁽¹⁾。こうした婦人会活動は、沖縄戦により一時中断されるが、戦後、「食料の確保と生活上の助け合い、さらに軍事占領の物騒な時代への自衛・抵抗、そして子育てとムラおこしなどに奮闘し」、「地域では自然発生的に婦人会が結成された」のである⁽²⁾。

読谷村座喜味の場合、1948年（昭23）4月、座喜味東川^トにおいて戦後の婦人会活動が復活した。疎開先や収容所等から引き上げてきた座喜味区民は、当初、座喜味本部落（現在地）への移動許可が米軍より出なかったため、東川での生活を余儀なくされた。本部落には、米軍の弾薬が集積されていたからである。東川での生活は、米軍の配給と荒地の開墾による食料調達、野戦服を作り変えて日常服を身に付ける等、日々を生きるために住民の苦難の歴史の始まりを刻むものであった⁽³⁾。

(2) 松田敬子の戦後生活史

本稿で登場する松田敬子（旧姓玉城、座喜味在、昭和2年生）は、十代後半に沖縄戦を体験しその後東川で生活を営み、そこで婦人会復活を目の当たりにする。松田は、1951年（昭26）、東川から座喜味本部落への移動後、婦人会活動を本格的に始め、その後、地域子育て運動の牽引車としての役割を果たしていく。松田は座喜味区の婦人会活動に一貫して取り組み、婦人会長（第17代、1957年度）としてその手腕を発揮し、現在でもなお、婦人会活動において指導者の立場にある。松田の戦後生活史を綴ることは、座喜味区の婦人会の実践史を語ることもである。また、松田らの婦人会活動は、婦人会独自の活動を展開しながら、「子を持つ一人の親」の立場から集落の子どもの遊び場づくりや子どもの健康・体力づくり運動を始め、1960年代初頭から始まる教育隣組運動の中核的な役割を果たしていくのである。その意味で、座喜味の婦人会の歩みは、同区の地域史の一側面と子どもの生活史を映し出す鏡である。

(3) 本研究の目的と方法

松田の座喜味区における実践の歩みは、基本的に2つのライフステージに区切ることができる。それは、戦後のムラの復興に関わる生活改善運動の時期と子どもの生活環境の整備や子育ての運動を展開し始める時期である。この2つのライフステージにおける地域活動を通して、松田の子育て観は形成されたものと考えられる。したがって本稿では、松田のムラ興しと生活改善運動期をライフステージ1、子どもの生活環境と子育て運動期をライフステージ2としてとらえ、それぞれのステージにおける松田の教育や子育てに関わる見方・とらえ方の形成過程に注目しその内容を明らかにすることを目的としている。研究方法は、座喜味区の婦人会長として活躍した松田敬

子の地域活動に関わってきた経験を、まず半構造化インタビュー法を活用して証言してもらい⁽⁴⁾、次に関連資料群とつきあわせることにより、「語り」の意味づけをはかるものである。なお、本稿では、松田の地域教育実践を特徴づける1950年代から、教育隣組運動が本格化する60年代初頭までを中心に報告する⁽⁵⁾。

2. [ステージ1] 松田敬子と婦人会の出会い

- 座喜味東川の生活と戦後の婦人会活動の復活 -

座喜味婦人会の発足は、1915年（大正4）である。戦前座喜味婦人会の活動は、冠婚葬祭に関わる行事、清掃検査、豊年祭・奉納祭等があり、戦中は、出征兵士の見送りや戦地への慰問袋の詰め作業、空襲に伴う消火訓練や竹槍訓練等の軍事訓練に明け暮れた。1943年（昭18）年頃から日本の守備隊が座喜味内で駐屯し、字事務所（現在の字公民館）を始め民家は軍に供給された。戦局が厳しくなる中、1945年（昭20）3月23日、島田観知事は老幼婦女子の国頭への夜間移動の実施を指示し、それに基づき区民は北部の山岳地に疎開した。松田は読谷村渡慶次出身であり、他の村民と同様に北部に避難し、戦後、帰村し結婚することになる。

戦争が終わったとき、私は18歳でした。戦時中はヤンバルに避難して、戦争が終わるとヤンバルから引き上げてきました。漢那から石川に来て、それから読谷に真っ先に来たんですよ。私は読谷の渡慶次出身ですが、部落には帰りませんでした。というのは、アメリカ軍の命令が何かわかりませんが、部落から信用できる人を食料配給所に送れということで、私は先発隊の意味もあつたんでしょうね、渡慶次の隣の部落である高志保に行かされました。そこには、食料配給所があつて事務会計の仕事をしました。そこで座喜味出身の人と結婚しまして、その後しばらくして旦那の出身部落に行きました。座喜味に行くといっても、本部落は軍の施設だか何かわかりませんが立ち入り禁止でしたので入ることはできなかったですね。座喜味の東川で住むことになりました。当時は、^{クッパイク・フオ}2×4と呼ばれる仮小屋でね、2世帯が一緒に住んでいました。

東川での生活が始まると戦後初めての婦人会活動が自然発生的に起こりました。半強制と言ったらおかしいけど、地域に住んでいる人たちは必ずこうした活動には参加する。食べるために生き延びるために、男の人たちは、軍作業にいくわけ。女の人は、前もって村が決めた土地に行つて、荒れ放題の土地を耕さないといけない。戦争で土地はやられているもんだから、石はごろごろ、荒れ放題。だけど、戦争を生き延びてこれからは助け合つていかないという気持ちが強かつたですね。ナーハイバイ（注：個人個人の勝手な行動を意味する）ではだめだという時代だった。生きていくためのひとつの方法ということで、カヤブキの小さな集会所に集まつて、「男は軍作業でいないから、留守の間は、私たちが家を守らないといけない」と考えましたね。戦前なら、「銃後のまもり」とか言つてたでしょう。そんな感じ。生きるためだから、小さい子がいる人もおんぶして集まつた。もうその頃には、

婦人会という名称は使われていたね。

婦人会の活動で一番先にやったことは、水汲みでしたね。山の下にわき水があつてね。大した道具もないのにわき水が出るころまで道をつくって。大変な仕事だったね。小さい子をおんぶして水汲みしたり、また、誰かが当番になって子どもを預かったりして、そんな風にして活動が始まった。婦人会は奉仕じゃない、当たり前のこと。生きるために水汲みをしていたね。次に婦人会がやったことは、軍からドラム缶をもらって、たくさん水を貯めるわけ。あの頃の家は、カヤブキで炊事は薪を燃やしてするもんだから、火事やボヤが多くてね、それで水を貯めたドラム缶が必要だったわけ。その準備も婦人会がしていた。薪取りも婦人会の仕事だった。私たちは、戦争で一時期婦人会の活動が中断したんであって、戦前の婦人会の活動から続いているという感じで進めていましたね。この東川で活動が始まったという感じ。東川は座喜味の人たちだけだから、自然に活動が始まった感じだった。しばらくしたら、あの部落では婦人会が始まった、この部落でも始まったという感じでしたね。

住民は、「戦争を生き延びてこれからは助け合っていないという気持ち」を抱き、相互に支え合いながら新生活の立て直しを図るのであった。座喜味に嫁入りした松田は、ごく自然に婦人会活動に参加し、荒れ放題の土地を耕し、飲料水を確保することが最も重要な労働であった。松田は別稿にて次のようにも述べている。「水道の施設もされていない時代、水の確保は大事なものだった。復興工事で東川（ダツチンガー）などの改修がすすめられていって、座喜味は湧水が多く飲料水や、洗濯など便利だった。井戸をいつも清潔にするため、柄シャクを持って水汲みにいくこと、また雑巾や、オシメの切端を井戸周辺に捨てないようにと、婦人会が立て札をし毎月の清掃も行われた⁽⁶⁾」。婦人会は泉井戸の清掃と川道（カーミチ）の修理は婦人総動員で取りかかり⁽⁷⁾、防災のためにドラム缶を準備することまで行っている。仮小屋生活の東川で始まった婦人会は、区民の生活基盤を確立するために奔走しているが、戦前婦人会活動の延長線上に戦後の活動があるという意識で活動が行われていたのである。ところで、復員兵が引き上げてくると、東川の人口も増え、出生率も増加してきた。出産祝いは派手さを増してきたので、1950年（昭25）4月には、婦人会総会にて、出産祝いは豆腐三丁等と取り決められたが、この点については、前年1月の婦人常会においても協議事項となっていた。婦人常会では、「お祝の場合は招待名簿をつくり字に報告」し、婦人会長及び青年会長は、「招待名簿を持って、お祝いする家の門前に席を取り祝儀袋を受け取る」「お祝いは午後十時までに終わる。時間外は鳴物はやめること、但し近親者は、時間外の懇談だけは許可する」「御馳走は、村の規定に順じ必ず三皿以内に限る」となっていた。東川での行事の再開について、松田は、次のように述べている。

東川では、子どもがたくさん生まれるようになったけど、でも、戦争未亡人もたくさんいる。戦争が終わったのに悲しい顔をするな、ということで、元気を出そうということで、みんなで綱引きしようということになった。軍のワイヤーに何かを巻き付けて綱を作って、西と東に分かれて、綱引きしたね。婦人会は景気づけで綱引きの前に踊って、盛り上がり、みんな喜んでね。みんなで地域共同体をつくったという感触があつたね。太鼓も何も無い時代に、よくやった。子どもが生まれるようになると、ボージャースージー（注：出産祝いを意味する）があちこちで行われて、それが段々、派手になってきたわけですよ。それでね、卵は5個か7個ね、多分、七五三にあやかっただことだと思うけど、その卵をもってお祝いしたりしたんだがね。豆腐だったら三丁。屋敷内に転がっている臼をもってきて、配給の大豆をひいて豆腐を作ったね、実際用だね。残りは、少しだけ自分たちが食べるもの。沖縄の人って、自分たちは食べなくても、実際用として特別にとったりするでしょう。

東川での綱引き会は、敗戦後の虚脱感の漂う区民の間に、かつての地域共同体意識を芽生えさせるものであった。東川で生活を営む人々は、旧座喜味区民であり、戦前共に生活をしてきた人々であるから、ひとつの行事を通して一体感が育まれたのである。松田の夫・武雄は、「娯楽も何もない頃に、戦前のような綱引き大会や相撲大会ができたことは、いやなことを忘れさせて、あの頃（沖縄戦前の生活を示す - 筆者）を思い出させるものであった⁽⁸⁾」と述べている。共同体意識があらためて芽生えてくると、戦前の座喜味の慣習・行事が復活し、その方法も次第に慣例に倣うものになった。東川生活で再開した出産祝いも、モノ不足でありながらも、次第に、派手さを増してきたのである。松田は、出産祝いの様子について次のように述べている。

戦争でたくさんの方が亡くなったでしょう。みんな、戦争で人に話が出来ないぐらいの痛手を負ってきてね。だから、一人でも子どもが生まれると、とにかく、自分のことのように嬉しいわけ。自分たちの子孫が生まれたんだと言って、自分たちが生き返るような感じがして、みんなで祝う気持ちがあつたわけさ。あまりモノがない時代だったけど、それなりにお祝いをしたくなるわけさ。お祝いを嫌うということはなかったね。米軍の配給と自分たちで作ったものを食べていたんだけど、東川から本部落（戦前の居住地である座喜味区を中心集落を示す - 注）に移動したら生活は少しずつ安定するから、また、誕生祝いなんか派手になってきたね。

東川では貧しい生活の中で娯楽を求めて綱引き会を開催し、婦人会は、派手さを増してきた生年祝いについても取り決めていく。しかし、生年祝いを含む冠婚葬祭の改善は容易に改まるわけではなく、1951年（昭26）の座喜味（本部落）移動後も、松田らの改善運動は続けられていくことになる。

3. 松田の婦人会活動の覚醒 - 座喜味 (本部落) への移動と冠婚葬祭・環境衛生の改善 -

1950年代に入ると、沖縄全域で生活改善に関わる運動が広がり始めた。1951年(昭26)3月、沖縄婦人連合会は生活改善普及員の配置と農村婦人の指導のため生活改善課設置を政府に陳情し、同年9月には農業改善局に生活改善課が設置され、竹野光子(第4代・6代沖縄婦人連合会会長)が課長に就任した。生活改善課は、沖縄本島、宮古、八重山、奄美大島に生活改善普及員を配置して活動を本格的に始めた。

この頃、座喜味本部落に瓦屋根の字公民館が完成し(1951年10月)、婦人会は、ここを拠点に活動を進めた。部落内の婦人全員が婦人会に加入した。1952年(昭27)から生活改善普及員による料理講習会は度々行われ、婦人会では、料理、洋裁、和裁、家庭科の研究班を編成した。定期常会や婦人講座では、冠婚葬祭に関わる取り決めが行われたが、改善には時間を要した。例えば、出産祝いについては先に豆腐三丁の持参という取り決めになっていたが、それが十分守られていなかったため、その後も繰り返し常会で取り上げられ確認されている。1954年(昭29)10月の婦人常会では、「出産祝いに決められた以上持って行く人は密告して婦人常会の時報告する」ことも決められ⁽⁹⁾、慣習改善が婦人会の当面の課題であったことがわかる。同年1月には、座喜味区の生活改善グループ(名称:座喜味仲良しグループ)が結成され、冗費節約運動(祝祭冠婚葬祭祝の合同)、生活改善、台所・カマドの改善を目的として活動を進めていたが⁽¹⁰⁾、松田が「身に付いた生活習慣、行事の習慣はすぐにはとれない」と述べているように、短期間で生活を改善することは至難であった。

東川では、生年祝い等が年々派手になってきたもんだから、座喜味の本部落に移ってきたら、冠婚葬祭の改善が始まったね。生活改善の運動だね。こうした祝い事などの改善をしないと自分たちの生活ができない。東川ではたくさんの子どもが生まれて、段々成長してきたら、やっぱり、子どもにはお金がかかるでしょう。教育にお金がかかるとわかってくと、今までのように交際のためにお金は出せないと考え始めましたね。みんな子たくさんでね。生活は大変なのに、交際中心の生活はやっぱり無理でしょう。交際を抑えるために、家計簿をつける運動も始まりましたね。交際の改善とか、家計簿をつけるとか、そんな話し合いは、公民館が狭いという理由もあったけど、この家でよくしましたよ。いろいろな冠婚葬祭のうち、何に消費が多いのか、祝い事なのかどうか、葬儀関係なのか、そんなことを家計簿とにらめっこして話し合いましたね。沖縄は仏壇に関係する行事が多いもんだから、しかも、何十年も続いているものだから、これを改善していくには骨が折れる、時間がかかる。身に付いた生活習慣、行事の習慣はすぐにはとれないもんでね。

沖縄の冠婚葬祭では、お返しというものがあるでしょう。何か

他人からもらったら、お返しとって、必ず準備していくわけね。そうした習慣は頻りにしかも長く続いているわけですよ。この改善は、大変な仕事でね、いろんな人から地域全体から随分、怒られました。婦人の先輩たちや村の長老たちは、相当怒りましたね。「あんたたちはパチがあたるよ。」とか、「婦人会をあんな若い連中にさせるから、変なことばかりするさ。」とか。村八分前まで追い込まれた時もありました。でも、若い私たちは、小さい子どもがいるし、生活はできないのに行事は大きくなるというのは、おかしいでしょう、子どもの教育にまわしていきましょうというわけ。みんな本音と建て前があって、本当はやりたくないけど、建前でやっているという感じだね。座喜味の人は、心の中で思っ

松田の証言から、生活改善の当面の課題は、生年祝いや冠婚葬祭の改善に向けられていることがわかる。現状の生活を維持・向上させるためには、生活の改善が不可欠であり、その改善運動の一環として1960年(昭35)から家計簿をつけることも始まった⁽¹¹⁾。しかし、松田らの婦人会の生活改善との格闘は、長期戦に入る。松田は、まず集落に根付いている「お返し」と格闘した。「お返し」とは、生年祝いや冠婚葬祭の際の来客に対する返礼を意味するもので、相当の品を準備することである。ここでいう「相当の品」を誰に対してどの程度の数(量)を準備するのかが、当事者(婦人)にとっては頭を悩ます一番の問題であった。しかも、「相手に対して失礼に当たらない品」を準備することの難しさと家計への圧迫であった。

松田はこうして「お返し」の習慣と格闘していくことになるが、格闘するのは慣例としてこれまで「お返し」を続けてきた先輩であり、シマの長老との対峙であった。シマ社会の生活改善を進めるために結成されたグループに対しても、「グループ員が率先して生活改善を実行できなければ誰がやるのか」という風当たりや「グループ活動は、金のある人、暇のある人のやるものだともいわれ、次第にグループから去っていく⁽¹²⁾」者も現れ、生活改善の運動は窮地に立たされることもあった。そこで、生活改善のグループは、これまでの活動のあり方を反省し、課題を浮き彫りにすることで活動の展望を切り開いていこうとした。生活改善グループがまとめた課題は、活動目標の不明確、活動計画の欠如等であった⁽¹³⁾。これらをふまえて、同グループは、活動の趣旨を広く区民に伝えることや年間計画に基づいた活動をしていくこと、集まりをよくする方法として模合を始め、この資金を子どもの勉強部屋の改善に充てていくことにしたのである。こうして、シマ社会で伝統的に続いてきた慣習を維持しようとする側から「村八分前まで追い込まれた」松田ら若い婦人会役員は、同年代の婦人と話し合いを積み重ね、子どもの教育を最優先に取り組むべきだという考えを前面に押し出ししながら、簡素化の道を模索したのであ

た。「教育にお金がかかるとわかってくると、今までのように交際のためにお金は出せない」と述べる松田の言葉から、生活改善に立ち向かう姿勢が伝わってくる。こうして、個々の生年祝いは、のちに集落の合同祝として開催されるようになる。

ところで、生活改善に立ち向かい、孤立しがちな婦人会の役員が最も頼りとしたのは、生活改善普及員の助言であり連帯であった。

その頃、地域を立て直すには、普及事業しかないという考えがありました。生活改善普及員という人がいて、この人たちが、「このままの生活ではダメだよ」という指導があつてね。人間国宝の読谷山花織の与那嶺貞さんも一時期、普及員だったね。先ずこの貧しい暮らしから立て直そうという考えが強かったし、私たちはこの時期は、「復興期」と呼んでいましたね。座喜味に移ってから生活の立て直しのために本当にいろんなことをしましたけど、やっぱり、衛生面をきちんとしてないと伝染病や病気が流行るということで。一升瓶に水を入れて瓶の口に細い管を差し込む、これを逆さにして、トイレから出てきたら、手の平で管を押すと水が少し出てくるという仕掛けをつくった。手を洗う習慣をつくらうとしたわけ。婦人会と生活改善グループは、一緒でしたね。また、蚊や蠅の退治のために、汚水とか下水とか、そのドブをさらってきれいになりましたね。蚊や蠅は、伝染病の原因でしたからね。清掃は徹底しましたね。石川の保健所から先生が来て、保健衛生の話とか、食の話とか、いろいろお話がありましたね。

1955年（昭30）、普及員による生活改善指導や婦人常会における「盆行事の持ち方」「時間励行」「生活改善グループの編成」等が議論され、村外から島マス⁽¹⁴⁾の講話「子どもの躰について」や嶺井百合子⁽¹⁵⁾の講話「新生活運動を進めるには」が開催された。新生活運動は、新旧の正月を新正月に一本化運動に象徴されるように、旧慣習の改善と生活向上を目的とした運動であった。一方、公衆衛生についても、婦人会は、地区衛生担当者を招いての講演や婦人会独自の清掃検査を実施したりした。松田は、区内の環境衛生について次のように述べている⁽¹⁶⁾。

当時の婦人会の主な活動は生活の立て直しでした。部落で環境衛生の整備が進められていく中で、婦人の役割は毎日の清掃に重点をおいていた。蚊や蠅の発生源を防ぐために、清掃日にはいちいち各班をまわって点検した。薪を燃やしているので不潔になりやすいため、台所や天井のスス払いからカマドの検査もやった。当時は「カマ、マーイ」といっていた。灰の検査もあったが、灰は肥料として、または灰の上澄み液は、洗濯に利用するなど大切なもので大事にしたものです。また戦争の後に軍隊の残っていた鉄カブト（帽子）は、台所の器具としてどこの家庭でも大いに役立ったが、あとで使い捨てた鉄カブトや、空かん、ドラム缶等にポーフラが湧いて清掃検査の度に、保健所より指摘され大変でした。水道の施設もされていない時代、水の確保は大事なものであった。復興工事で東川（ダッチンガー）などの改修がすすめられて

いて、座喜味は湧水が多く飲料水や、洗濯など便利だった。井戸をいつも清潔にするため、柄シャクを持って水汲みにいくこと、また雑巾や、オシメの切端を井戸周辺に捨てないようにと、婦人会が立て札をし毎月の清掃も行われた。

当時、区内では屋敷内で家畜を養っていたので蚊や蠅が発生し、婦人会は、それらの防止のために清掃と点検を続け、カマドの点検や井戸を清潔に保つ等の活動を進めた。松田は、こうした冠婚葬祭の改善や環境衛生を整えながら、地域の活性化と地域における子育ての運動に傾倒していくのである。次の松田の証言は、子どもの教育を中心にすえた活動が展開され、しかも婦人会が積極的に関わった点を挙げている。

次第に子ども中心の生活になったね。次を育てるという考え、跡継ぎを育てるという考えは強かったね。次の世代の子どもがしっかり育たないと、地域は良くならない、そういう考えだった。後で十羽養鶏運動とか、子どもの遊び場を作ったりとか、教育隣組の運動があるんだけど、それは全部子どものことを考えてのこと。今考えても子ども中心の活動だったと言えると思うよ。特に、母親が直接子どもに関わって活動していた。だから、活動はうまくいったと思うよ。婦人会は字のことについては、全部に関わっていた。

座喜味区の婦人会は、生活改善を主たる活動として進めてきたが、次第に地域の子どものように育てるのかという課題意識を抱き、ムラの活性化と子育て運動を重ねながら運動を進めるようになる。こうした座喜味区における子育て運動の意識化は、当時の子どもを取り巻く生活環境とも深く関わっていた。それは、端的に言えば、基地環境の子どもへの影響と米軍兵による人権侵害事件の頻発であった。こうした中、沖縄子どもを守る会（1953年結成、屋良朝苗初代会長）は、子どもを取り巻く問題状況に関連した講演、懇談、広報を通じて、宣伝・啓蒙活動を始めていた。子どもを守る中央大会、訪問教師との連絡会、特殊教育に関する協議会、福祉機関との連絡会等の開催である。また、子どもの生活や事故、非行問題に関する調査・研究活動、行政機関への要請を行い、子どもの生活環境の整備に努めていた。沖縄島全体で子どもを守る運動が進展している中、座喜味区では、子育てに関わる運動がどのように進められたのか、[ステージ2]では、これを検討する。

4. [ステージ2] ムラの活性化と子育て運動のうねり - 婦人会エイサーと子どもの遊び場の設置 -

沖縄の「青年エイサー」は、まさしく青年が担っているところにその名があるが、座喜味のエイサーは、婦人会が戦後初めて先鞭をつけ、1955年（昭30）に復活させ

た点に他地域との違いがある。松田は、戦争により虚脱感と絶望感に苛まれ、荒んでいた区内の青年を見かね、彼らを励まし勇気づけるために婦人会によるエイサーを始めた、という。しかし、その実現に至るまでの道のりは、決して平坦なものではなかった。松田は、婦人会エイサーの実現のために、区内の青年との激しいぶつかり合いがあったことを次のように述べている。

私が二十代後半になると、婦人会でエイサーをすることになったね。婦人会がエイサーをするというのは、可笑しいことだと思うけど、いろいろ理由があった。実は、座喜味城址は軍の基地だった。ナイキ基地といってね、ミサイル基地。城址内は護衛もたくさんいてね。そこの城址周辺で、青年が酒飲んで酔っぱらって、コーラ瓶を割って、暴れたんでしょね、道に散乱して。公民館の窓も壊されたりして、戦争で、親や子どもを亡くしたりして、心が荒んでいたんだろうね。誰も抑えきれない。青年同士の喧嘩も絶えなかったね。そしたら、区長さんが、「青年が暴れて大変だから、お盆の前に婦人会がエイサーみたいなものをやったら、青年の心も和むのじゃないか」と言われてね。婦人会で持ちかえって相談したら、「踊り方はわからんけど、まずはやってみよう」ということになりました。パーランクーは無いし、エイサーもわからない。そしたら、部落にある仲宗根商店のハワイ帰りのおじいさんが、援助しようということになって話は進みました。仲宗根商店は戦前から浄土真宗でしたからね、エイサーは仏教と関係があるからということでした。エイサーは、祖先供養のためにするというと戦争で亡くなった人たちを慰めるという意味でもいいということになりました。荒れた時代だというのはいつの世もあつたけれども、今度は戦争で荒れた時代を迎えている、戦争で犠牲になった人たちのためにも、エイサーをしようということになりましたね。

話は進んで、部落の人から、「敬子さん、石川で太鼓を作る人が出てきたみたいだから、行ってごらん。エイサーは太鼓がないとできんよ。手を叩いてはエイサーはできんよ」と言われて、あの当時は、車も何もない時代だから、婦人会で歩いて石川まで行きました。そんなにお金がないもんだから、大太鼓は注文しなくて、パーランクーを十数個買いました。「これだけでエイサーできるよね、踊ろうね。」ということで帰りました。部落の一部の人たちからは、「あんたたちは、やらかしたね。こんな時代にエイサーができるわけない。」とかまだ言われましたね。しばらくして、注文したパーランクーが届いた。嬉しくてね。村の先輩のおじいなんかも、喜んでね。初めてパーランクーをパンパンと叩いたら、「ああ、もう戦争は終わったんだね。生き延びて楽しい時代が来るね。」という気持ちがかみ上げてね。だけど、その晩。十数個のパーランクーが壊されてね。皮の部分がカマで全てやられて。あの青年たちが壊したわけ。理由は、「たくさんの方が戦争で死んで、犠牲にして、あんたたちだけエイサーをして楽しいか。俺たちは踊る気持ちにはなれない。」となってね。荒れていた青年たちは何をするかわからんもんだから、怖くてね。婦人会の人たちは怖くて、そしてパーランクーが壊されたことで泣いて、本当に残念だった。やっと作ったパーランクーだったのに。そしたら、戦前区長をしていた長老級の人に来て、「これぐらいでがっかりするな。世の中はこんなものだ。戦前は先輩の言うことは聞

いていたが、今はそんな時代じゃない。荒れた青年たちを変えるのは簡単じゃないが、まずは話し合ってみよう。」となった。ところが、婦人会が青年たちの所で話をしようとしたら、また喧嘩になってね。数ヶ月後に、仲宗根商店のおじいさんが来て、「お金をもう一回出すから、パーランクーを作って、エイサーをしてくれ。」となってね。破れた皮を張り直して、パーランクーを直した。今度は、青年たちは、壊さなかったね。「誠意は通じるもんだな。」と思いましたね。エイサーの練習の前に、婦人全員で、座喜味城址にウートーして、それから踊った。エイサーの時には、部落中の人が集まって、すごかったさ。婦人会のエイサーはしばらく続いて、その後、青年会に引き継いだね。青年会は、待ってましたと言わんばかりでね。「あんたたちが立ち上がったなら、部落は盛り上がるよ。字の復興はすぐ出来るよ。」と。仲宗根商店のおじいさんには、相当金銭面で世話になって、また、エイサーを踊るたびに寄付金を募って、三回目からは、服も揃えることができたね。

座喜味婦人会は、エイサー復活のため、婦人会内でレク部長を選出し準備を進めた。また、上述のような松田らのパーランクーの準備が進む一方で、当時の婦人会長(1955～56年度)・又吉シゲは、実際の演舞の仕方を経験者に習い、練習を始めたのである⁽¹⁷⁾。

前区長、比嘉利吉さん宅へ相談に行き、いろいろと教えていただきました。タイコ打ち、三味線、踊りを指導して下さる方々が決まり、お願いに行くことになりました。副会長の松田ハルさんは妊娠中でありながら、師匠さん宅へのお願いに昼、夜と頑張りました。快く引き受けて下さったので二人ともホッとしました。師匠さん方のお話ではエイサーを熟練するには二ヶ月はかかるとの話を聞かされ、会員はみんなびっくりし練習日を決めて始めました。初めてのエイサーを踊るのですから、ヘーシが違っていると笑われました。その当時、電話や車はもちろんのこと、石油やコンロもない時代です。豆腐や餅も石臼を使って作り、薪をまやしているので、大変忙しい貧しい生活でした。しかし、その忙しさをのり超えて夢中に踊り続ける姿に私は感謝の気持ちでした。

婦人会のエイサーは好評であった。1957年(昭32)の2回目の婦人会エイサーに対する区民の寄付金は、座喜味の子ども遊び場の設置のために充てられた。「子ども用の遊具というものが無かったもんだから」というのが主な理由である。子どもの遊び場の設置運動は、当時、全県的な運動として展開されていたものであり、松田が述べているように、教育隣組の結成と運動につながるものであった⁽¹⁸⁾。

各家庭をまわって寄付金を募ってお金のないところからはとらない。区長さんを先頭にして、私がお金を集めて。集めたお金は、何に使ったかという、子どもたちの遊び道具ということで、滑り台を作った。公民館の直ぐ側に作った。その頃、子ども用の遊具というのは無かったもんだから、まずは滑り台。次に大きなブ

ランコ、相撲ができる場所も作ったね。子ども用の遊具ということで作ったんだけど、私たちも若かったもんだから、月の出る夜中に集まって、滑り台やブランコで遊んでね。自分たちもとても楽しんでね。楽しくて、楽しくてしかたがない。恥ずかしいとは思わなかった。そしたら、また地域から「今度の婦人会の連中は若いから、夜中に子どもと同じようにブランコ乗ったりして、遊んでいる。」とか言われてね。子どもたちは遊具に夢中でね、その後、教育隣組が結成されたね。

1950年代に入ると軍用車輛による輪禍への対策として子どもの遊び場を設置する運動や環境浄化運動の高まりがみられた。警察や児童相談所、防犯協会等の協力もあって、全県的に遊び場の設置が進展するのはこの頃である。1958年(昭33)から琉球政府より「子どもの遊び場」の設置に対して補助金が交付され、市町村や個人又は団体によって「子どもの遊び場」設置が行われた。1957年(昭32)11月から12月にかけて、読谷村では、「第6回青少年不良化防止運動」が始まり、その実践目標の冒頭に子どもの遊び場の増設を謳い、社会福祉協議会の次年度の事業計画においても子どもの遊び場設置を奨励していた⁽¹⁹⁾。翌年の5月、中部地区社会福祉協議会の調査によると、「中部地区における子供の遊び場の設置状況は良好で、読谷村12ヶ所(うち部落設置7ヶ所)具志川村7ヶ所(うち部落設置5ヶ所)中城村9ヶ所(うち部落設置7ヶ所)」等となっている⁽²⁰⁾。座喜味婦人会は、子どもに安全で遊べる空間を提供するために遊び場を設置し、「子を持つ一人の親」の立場から、以後、子どもの健康づくりや学力問題についても関心を深めるようになる。ところで、松田の座喜味区の婦人会長の任期は1957年度(昭32)の一年のみであったが、会長退任後も地域活動に積極的にに関わり、後述する教育隣組活動の中心的な指導者になるのは1960年代に入ってからである。

5. 子どもを中心にすえたムラ興し

- 子どもの栄養と十羽養鶏 -

松田によれば、戦後、貧弱な子どものために「食」を確保し、健康な体づくりをしていくことが緊急な課題であった、という。そこで、栄養不良の子どものために考え出されたのが、「十羽養鶏」運動であった。各家庭十羽の鶏を飼い、毎日産み落とされる卵を子どもや家族が食することで栄養補給をするというものであった。

子どもの健康づくりというか、体力づくりについての学習会は盛んにありましたね。子どもに腹一杯ご飯を食べさせようとか、食べてはいるんだが、芋ばかりが多くてね。子どもの栄養についての学習会はとても盛ん。その時は、学校に欠席しないで、毎日学校に行く子どもを育てようということになりました。学校に元気に行ける子ども。当時は、芋に塩をふりかける程度。学校か

らお便り帳というものがあって、先生から「この子にもっと栄養を」ということもありまして。怖かったのは、子どもが病気になることでした。保険も何もない時代ですから、病気になったら、家族は病院への支払いで飢える、そのまま亡くなることもあるしで。病気にしないためには、「食」が一番だということで、保健婦を呼んでの学習会。講師の話では「卵一個でこれだけの栄養があるのか。肉は食べることができなくても、卵なら何とかなる」ということで、一家に鶏十羽運動が始まった。一家で十羽の鶏を飼うと、卵を産む、その卵を食べるというわけ。自分たちの鶏が隣近所に行かないように、鶏の足にひもをつけて、下駄を履かせる。沖縄の鶏はみんな下駄を履かせるようになった。3羽ぐらいから始めて、後は、「十羽養鶏」と呼んでいたね。また、保健婦さんは、「子どもには栄養が必要だから、美味しいものはまずは子どもにあげてから」という話をしたら、翌日には、部落の人から叱られてね。沖縄では、昔から、年寄りを大切に、美味しいものは上の人たちから食べて、子どもは後でいいという考えがあったもんだから。あの保健婦の話はけしからん、大変な世の中になるよ、あの話は間違っている、と。

十羽養鶏運動は、普及事業だったと思うよ。一番やりやすいものだったと思った。すぐに鶏を飼うお金は無いもんだから、ヒナを買ってきて、これを大きく育てる。メスをたくさん買ってきて、その中にオスを入れる。そしたら、やがて卵を産む。親としては、子どもに「はい、卵があるよ」と言える。それは、親としてとても嬉しいことだった。

私たちは、子どもの健康が第一で、学力はその次。まずは、病気になる子どもを育てる、その次に賢い子どもを育てるという考えでしたね。学力についていける健康づくり。当時は車もない時代で、学校まで歩いていけなかつた。体力がないと、学校まで行けないわけ。体力をつけて学校に行かせようとして、子どもの栄養を考えて、鶏とかを飼ったりしたら、出席率もよくなりましたね。こうした子どもの健康づくりの考えから、赤ちゃんコンクールが始まって、「健康優良児」がたくさん出てきましたね。この赤ちゃんコンクールは、復帰後に美化コンクールに代わりました。公民館の美化から始めましたね。

子どもの健康増進を図る目的で、1956年(昭31)から毎年「赤ちゃんコンクール」が開催された。生後7ヶ月~18ヶ月までの健康優良児を選出し、村、地区、中央へと競うのであった。

6. 地域子育て運動と婦人会

- 共通語励行・学力向上・教育隣組 -

松田は1950年代後半から60年代にかけて、共通語励行や学力向上についての話題が多くなってきた、という。これを裏付けるように、1956年(昭31)に実施された「全国一斉学力テスト」の結果は、沖縄の学力が全国最低にあることを示し、社会問題化した出来事であった。同年12月10日付の「琉球新報」は、「低い沖縄の学力全国平均よりはるかに下回る」「国語算数、小中高校ともに悪い」と報じた。沖縄の子どもの学力が新聞紙上で議

論される一方で、地域においても子どもの学力向上に関わる活動が動き始めた。

話は少し戻りますが、共通語励行があつてね。これも婦人会が一生懸命だった。おじい、おばあと一緒に生活している子の中には、共通語が話せない子がいて。学校の先生は、「共通語が話せないと授業がわからない。共通語ができる子は、理解も早い。」とか、そういう話をもってきたり、「先生、ウチナーグチで言つて。そんな言葉聞いたことないから。」という子どもがいたとか。そんなことを家庭訪問で聞いていると、共通語を使うように努力しないといけないということで始まった。最初は、家で、夫婦が「おはようございます」からするんだが、そんな挨拶をしたこともないもんだから、恥ずかしくてね。でも、段々、慣れてきたら、子どもも「おはようございます」を言うようになった。親も本音の部分では、デキヤーの子がいに決まっている。だから、卵を食べさせて体力をつけさせて、デキヤーに育てたい。共通語が話せると、デキヤーになるってよ、と。親たちは、一日中大和口で話すのは難しいからといって、「おはようございます」から始まったわけ。

学力向上の一貫として、地域の子どものバラバラにならないように、教育隣組を作ろうとなりましたね。字の婦人会長が教育隣組の長になり、婦人会の各班の班長は、自分の班の隣組を世話することになった。婦人会と教育隣組は一緒でした。今もある学事奨励会は、区長主催というか、字の行事ですが、婦人会と教育隣組が実際の仕事はするということかたちでした。公民館は人で満杯でした。婦人会の人は、自分の子どもがいる教育隣組の世話をするわけだから、自然なんですよ。私も当然教育隣組の世話人になりまして、発表会にも出ました。でも、復帰後しばらくして、婦人会は教育隣組の活動から手を引いていって、育成会がバックアップするんですけど、活動は難しくなってきたみたいですね。育成会にバトンタッチするやり方をもっと考えてもよかったですね。

また、教育隣組は、子どもの学習習慣をつけさせようということで、札を作りましたね。「ただ今勉強中」とかの札。これを玄関に掲げて子どもに学習させるわけ。子どもの机も満足にない時代だから、ソーメンの木箱を改造して机を作る。いっぺんに全部の子ども用の机を準備することはできないから、時間をかけて少しずつ。札は区長さんを中心に作ったりして、本当に区長と婦人会が一緒になって地域活動を進めた時代だった。いつも、区長と婦人会は夫婦みたいだと言われていたね。地域を支えているのは婦人会、行政は区長さん。振り返ってみると、婦人会を中心にして地域の活性化から始まり、子どもの健全育成を起こしたんだが、今は、自治会にも入らない人も増えてね。

松田の証言から、当時の座喜味では共通語を励行することで学力の向上が期待できるという話題が存在し、地域の組織的な教育活動としての教育隣組においても当初から学力対策が期待されていたといえる。1961年（昭36）の座喜味婦人総会では、同区の共通語励行は優秀であると褒められ、翌年、各班毎に教育隣組が結成されるのである。1962年（昭37）の教育隣組は、「勉強時間中に外で遊んでいる子供は、家へ帰って勉強するよう指導する」

「巡回簿は前日で次の方へ渡す」「五時の時報がなると外で遊んでいる子供は家で勉強する」とあり⁽²¹⁾、教育隣組の役員は、隣組巡視の活動から始まっているのである。松田が述べている「学習時間を表す札」は、隣組巡視の象徴的なものである。座喜味では、札や木箱を活用しての机作り等がみられたが、こうした子どもの学習用具を整えようとした活動は、具志川市（現・うるま市）や宜野座村字惣慶においてもみられた。なお、翌年の1963年、学力向上を目指した指定教育隣組に座喜味二班三組（松田敬子）が決まり、その後モデル教育隣組、教育隣組実績発表大会にて発表する等の機会を得たのであった⁽²²⁾。

座喜味婦人会と教育隣組の結成・運動との詳細な関わりについては別稿に譲るが、上掲の松田の「復帰後しばらくして、婦人会は教育隣組の活動から手を引いていって、育成会がバックアップするんですけど、活動は難しくなってきたみたいですね」という証言は重要である。というのも、座喜味婦人会は、子どもの生活環境の整備や健康づくり、学力問題についても関心を示し、実際、アクションを起こす中で、座喜味の地域活動の要としての位置を占めてきた。それは、座喜味の地域活動の中に、常に婦人会の存在があることを意味していたのである。1966年（昭41）の婦人会長・比嘉文代は、「私達の時代は、教育隣組「子供会」は婦人会活動の一環として活動していました。五時になると各班の当番が見廻りをして、よく子供達にいやがれたものです。また各字の教育隣組の発表会も行われました」と述べ、婦人会は教育隣組の活動にも積極的に関与していたことがわかる⁽²³⁾。その婦人会が教育隣組から「手を引いた」ということは、中心的な役割を果たす人材がいなくなったことを示すのである。それゆえ、松田が「育成会にバトンタッチするやり方をもっと考えてもよかったです」というのは、後継者を十分育成できなかったことの反省の弁でもある。

7. 結 語

戦後のムラ興し・復興は、これまでの慣習との相克の中で生まれ、新しい形となって徐々に浸透し形成されたものである。座喜味区の婦人会は、子育てをしながら婦人会の復活の中で活動を見出していくが、年々派手さを増す生年祝い等の冠婚葬祭の改善運動に対して、周囲から圧力を感じ、また軋轢が生じた。「村八分前まで追い込まれた」と述べる松田の表現は、決して誇張でもない。新たなものを区内に取り入れ浸透させるためには、それ相当の覚悟が必要であったことを物語っているのである。生活改善の運動は、冠婚葬祭の改善だけではなく、区民の環境衛生を保持していくという面でも重要なものであった。こうした松田の地域における婦人会活動は、区民一人一人の生活基盤を安定させながら、婦人会エ

サーで地域活性化をねらい、子どもの遊び場を設置することで地域の教育環境を整備していこうとする姿勢があらわれたものであった。

このように松田の戦後生活史を綴っていく中で明らかになったことは、[ステージ1]では、行事を通して地域共同体意識の再生と一体感が育まれていく一方、派手な冠婚葬祭をめぐる問題が浮上してくる。これの改善を促す原動力となったものは、「次の世代の子どもがしっかり育たないと、地域は良くなる」と考える子どもの生活を中心に据えたムラづくりへの転換である。そのムラづくりへのエネルギーは、[ステージ2]でみたように、共通語励行や学力向上対策、または、教育隣組の組織化へとつながるものであった。特に、[ステージ2]では、子どもの栄養状態の改善のために十羽養鶏運動を起し、共通語励行と学力向上のために教育隣組を結成し指導したのは、母親を主たる会員とする婦人会の必然的な活動でもあった。松田は、「婦人会を中心にして地域の活性化から始まり、子どもの健全育成を起こした」と述べており、1960年代から始まる教育隣組は、まさしく地域の教育活動における婦人会の総力を挙げた地域子育て運動であったのである。子育てに直接に関わる母親の願いと活動は、地域で子どもを共に育てるという共通の認識に立脚したものであり、それが、上記の様々な活動を生み出し継続させてきたのである。この点に注目すると、婦人会は、戦後の地域興しや教育復興におけるキーマン的な役割を果たし、地域の子育て運動に介在した意義は大きかったといえるのである。

注及び引用文献

- (1) 小林文人・平良研一編著『民衆と社会教育 - 戦後沖縄社会教育史研究 -』エイデル研究所、1988年、304頁。
- (2) 名城ふじ子「沖縄戦後史と女性たちの取り組み」小林文人・島袋正敏編『おきなわの社会教育 - 自治・文化・地域おこし -』エイデル研究所、2002年、177頁。
- (3) 読谷村座喜味婦人会編集委員編『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』1990年、46頁。
- (4) ライフストーリー研究及び半構造化インタビュー法については、秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー - 学校参加型マインドへのいざない -』東京大学出版社、2005年、191頁～216頁。
- (5) 2007年(平19)1月24日、松田敬子から聞き取り

(於：松田宅 読谷村座喜味429番地)。なお、5月9日には、前回の聞き取り内容を確認したうえで、再度、聞き取りを実施した。

- (6) 前掲、『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』60頁。
- (7) 同上、46頁。
- (8) 2007年(平19)1月24日、松田武雄から聞き取り(於：松田宅 読谷村座喜味429番地)。
- (9) 前掲、『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』180頁。
- (10) 読谷村座喜味仲良し生活改善実行グループ『生活改善活動のあゆみ(20周年記念誌)』8頁。
- (11) 1960年(昭35)、座喜味区に家計簿記帳グループが誕生し、生活実態調査が始まった。地区・中央・全国大会へと生活体験の発表者が多く出場し、また貯蓄グループもできて、蓄えた中から子どもの勉強部屋の改善資金や進学資金にもなった。1962年(昭37)には琉球政府より貯蓄運動推進部落として表彰された。
- (12) 前掲『生活改善活動のあゆみ』49頁。
- (13) 読谷村普及事業連絡協議会『普及事業 十三の歩み』1971年、47頁。
- (14) 島マス(1900年[明33]～1988年[昭63])。戦後、コザ市を拠点に戦災母子世帯の救援や児童保護、売春防止等の活動に従事し、沖縄の社会福祉の基礎を築いた。「福祉の母」として知られる。
- (15) 嶺井百合子(1911年[明44]～)。戦後、沖縄の婦人問題に取り組み、婦人会組織の強化、婦人の地位向上、新生活運動時代への道を開いた。
- (16) 前掲、『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』60頁。
- (17) 同上、59頁。
- (18) 沖縄子どもを守る会は、1958年に児童福祉の観点から地域で子どもの生活環境を守り、健全育成を目的にした教育隣組運動を提唱した。
- (19) 読谷村役所「読谷村だより」1957年10月21日。
- (20) 沖縄市、浦添市、宜野湾市、具志川市、石川市及び中頭郡老人福祉センター運営協議会『中頭地区社会福祉の軌跡 第1巻・総論』1986年、92頁。ちなみに、補助金により整備された子どもの遊び場は、1980年度までに743ヶ所である(沖縄県社会福祉協議会編『沖社協三十年のあゆみ - 沖社協創立三十周年記念誌 -』1981年、392頁)。
- (21) 前掲、『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』192～194頁。
- (22) 詳細は、読谷区教育委員会『1966年指定教育隣組実績発表(資料集)』を参照のこと。
- (23) 前掲、『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』71頁。